

70歳代 私の青春時代の英語学習

松島善治さん

村の中学校から県立高校に入って英語の授業が始まるや、教科書の英語を流暢に読む級友がいるのを見て私は愕然としました。この衝撃は大きく、私は直ちに自転車ですら1時間かかる登下校の際に英語単語帖を一枚ずつ破いて、暗記する事を始めました。

は大変有り難かった、と今では思います。

後に私は代々木英語学校で英会話の勉強を始めました。ところが、授業が始まると、クラス各人の英語力がまちまちで、やや話せる5人が不慣れをいっあっているうちに、一高校生の家の応接間に月に1度集まって皆でワイワイと英語で話し合う会を持つことになり、さらに、皆でスキーや旅行に行くとか、喫茶店に集まるとか、グループが団体で行動するときは、全員が英語以外は話さないという取り決めで行っていたので、しばらく周囲からは変な目で見られていたようです。しかし、この経験などのお陰で、私は現在外国で比較的自由に英語で講演などが出来るようになりました。

80歳代 バラ色の青春

鈴木郁子さん

若い山脈を地で行った様な青春時代でした。私は終戦の翌年十二歳で伊豆七島の新島より伊豆の下田の知人の家に預けられ、女学校に入學しました。戦後はまだ客船もなく小さな漁船で荒海を渡ったのです。翌年六三制の切りかえで併設中学二年三年と高校になってからは、男女共学六年間同じ学校で、勉強は一年生より三年生男女一緒の選択制百分授業と戦後教育の試行錯誤の時代でした。一方あらゆるスポーツに、勉強に、とず

べてが楽しい時代でした。日焼けなど考える事なく真っ黒になってグラウンドをかけ回り廻り人生一番楽しく良き時代だったと自負しております。その後上京二年間の服飾学校と、その間父に云われるままに見合結婚しました。それから試験は大変なものでしたが楽しい青春時代があったからどんな苦労にも負けないでこのころの事が出来ました。今八十二歳一人で商売をしておりますが生涯現役を通す覚悟です。

80歳代 私の青春時代

谷吉敏子さん

私の青春時代は青春と云う言葉さえ聞かえない忌まわしい戦争に国民が全て狩り出された時代だった。食糧も乏しかった。女学校の五年生に成って居た私は学業はなく報国隊として軍需工場で飛行機の部品を造り鋳物の型づくりだった。卒業後も専攻課の名目で学校に籍を残し工場に通っていた。空襲も段々と激しくなって来ていたが、幸いに私の通う工場は小さな工場だったのでうまく避けられて居た様だった。工場の直ぐ隣りは商船学校であるが、毎日交替で見張り台に立ち敵機の来るのを見張った。その頃女の子も赤と白の手旗を持って信号を習っていた。商船学校の生徒と私の見張りの当番が同じらしく言葉通わぬ赤白の旗の信号今思えばそれが私のちょっぴりの青春だったのかと思う。

六月六日の夜突然の空襲警報飛び起きた。防空壕に入るやいなや雨が降って来たと思ったら石油の雨ぞして焼夷弾木造作りの家屋は一たまりもない。火が燃え尽き解除になり外に出て突然となり一面燃えかす一つない真白い灰だらけ。

60歳代 テンモウカイカイ

小畑和裕さん

私は、田舎町の高校で寮生活を送っていました。秋祭りが近づいたある日、町内会の会長が、寮長の私を訪ねて来られました。

「お祭りご苦労さん。疲れただろうから、寮長の君にだけ休暇をあげる。ただし、事情もよく分かるのでこのことは学校の記録には一切残さないよ。」飲酒を理由とする停学でした。「天網恢恢疎にして漏らさず。」教師はそのときこの言葉を教えてくれました。今から50年も前のことです。

60歳代 山歩きの日々

泉富夫さん

学生時代ワンダーフォーゲル部に所属し、山歩きの日々を過ごした。当時は、キスリングという帆布で作った横長のザック(その形状から「か」に族」と言われた)を背負い、主に東北の山々を歩いた。一週間から十日位を山で過ごす夏の合宿では、30kgぐらいの荷を背負った。初めの登りでは、歯を食いしばり、ひたすら足下を見つめ、汗だくになって歩いた。かたわらの高山植物の可憐な花、湧き出す清水、木々を渡ってくる風などが、疲れた体をいやしてくれた。3年の夏は、越後の荒沢岳、中ノ岳、駒ヶ岳を縦走した。荒沢岳の岩場を通過するのに時間を費やし、猛暑だった事もありパーティのペースが上がらず、予定していたキ

キャンプ地まで行けず、荒沢岳の山頂付近に露営した。満天の星を眺め眠った事、翌朝草に降りた露をなめながらキャンプ地まで歩いた事などは、40年以上経過した今でも鮮明に思い出される。

学生時代の山歩きの体験を通して、大きな自然の中での人間のちっぽけさを感じたり、目的に向かっていく自分のがむしゃらな一面に気づいたり、一緒にパーティを組む友の良さを発見したりもできました。

豊かに物事をとらえ、感動して生きる事が青春の良さだとすれば、これからもその様な歩みをしていきたい。2歳の孫から『じいじ』と呼ばれる私ではあるが。



80歳代 直白なズック靴

久島千代子さん

昭和十九年女学校四年生、大東亜戦争前、私の生活は武運長久を祈りつつ、千人針を縫う事、真年の私は年の数だけ縫う事が出来たので下校時町角に付む方の為の年の数だけ縫い帰宅すると近隣の方に頼まれたそれを、一生懸命縫った日々でした。

戦局がはげしくなり、私も女子挺身隊として、東府中の陸軍燃料本部(松根油)を製造したところに勤務する事になり、日々竹槍古又電話番などお国の為と一生懸命の日々を過ごして参りました。やがて五月二十五日東京大空襲にて我が家は焼夷弾で焼け、見渡す限りの焼け野原となり唯々茫然としてトタン板など集め

六月六日の夜突然の空襲警報飛び起きた。防空壕に入るやいなや雨が降って来たと思ったら石油の雨ぞして焼夷弾木造作りの家屋は一たまりもない。火が燃え尽き解除になり外に出て突然となり一面燃えかす一つない真白い灰だらけ。

幸い祖父が田舎にいたので、田舎に帰り必死で鉄を持ち畑をたがやした。夏の暑い中栗畑の草むしりしていると何か涙が止めどなく出て来る。何でもこんな事になったのか戦争さえなければ東京の薬学で勉強していた筈なのに一体私が何をしたらと云うのか。今の若者が欲しいまま、青春を自由を謳歌している事が羨ましい。だが、一言付け加えたい、自由を求め青春をたのしむには責任有る事を覚えて欲しい。

60歳代 高校時代のクラス会

大久保光男さん

還暦を過ぎた私にとって一番の楽しみは3年ごとに開かれる高校のクラス会だ。昭島市にある都立高校で生徒は武蔵野市から松原村まで多摩地域から通学していた。また高校生活3年間でクラス替えが1度もなくクラスメイトのことはよく知っていた。

卒業後20歳前後を境に25年近くも開かれず、50歳を前にして四半世紀ぶりに開かれ再会できた。嬉しかった。懐かしかった。楽しかった。30年も昔の私にタイムスリップした感じが人生で最も輝いていたころの自分を感じた。

「私の青春時代は高校生活3年間」に間違いはない。柔道部の部活は体が疲れ夜寝床に入ればすぐ翌朝、よほど熟睡していたのだろう。その後3年ごとにクラス会が開かれ昨年は還暦のクラス会となった。卒業後40年以上過ぎたがクラスメイトは少しも変わらない。私達はクラス会であつての青春時代を思い出し、青春時代に帰るのさう。

その後3年ごとにクラス会が開かれ昨年は還暦のクラス会となった。卒業後40年以上過ぎたがクラスメイトは少しも変わらない。私達はクラス会であつての青春時代を思い出し、青春時代に帰るのさう。

70歳代 残像

山室隆さん

今から半世紀以上も昔高校二年の僕は、早朝に牛乳配達のパイトをしていた時期があった。その頃密かなあこがれを抱いた、年上のひとの思い出を書いてみたい。

昭和三十〇年代半ばの当時、日本にはまだあちこちにアメリカ軍が駐留していて、それらの基地の街にはアメリカ兵との遊興を生業とする多くの人たちがいた。当時の世間には、そのような人々を蔑む風潮もあったが、一方では中級以上の軍人しか関わることのできない、美しい日本人の女性たちも存在した。

「今日は牛乳屋です。」僕はその美しい女性の一人の家に向かって声を張り上げる。月に一度の集金日だ。「はい。どうぞお入り下さい。」僕は格子戸を両手で引いて

頭を下げる。「いつもありがとございませう。」彼女は博多人形の優美さで近づくと、真っ直ぐな脚にジーンズをびったりフィットさせて、磨き込まれた上り框に音も無く正座すると、ポニーテールを小さく揺らして、僕にねぎらいの言葉をかけながら釣金を手で差し出す。釣金にきっちり小銭を乗せてだ。静かに微笑んでいる彼女を僕は見つめる。一瞬震えに耐えて。でもそのまま。「いつもありがとございませう！」心ときめくこの儀式を八回重ねて僕はパイトを辞めた。幼いばかりの自分に負けたのだ。